

令和 6 年 4 月 1 8 日現在

機関番号：34316

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13125

研究課題名（和文）日本の大学における英語リメディアル学習者の動機づけ発達パターンの分析

研究課題名（英文）Exploring Japanese remedial learners' non-linear motivational development in an EFL classroom

研究代表者

山岡 華菜子（Yamaoka, Kanako）

龍谷大学・経営学部・准教授

研究者番号：40726121

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 500,000 円

研究成果の概要（和文）：データ分析の結果、「動機づけが低い状態で不安定に変動」「動機づけが低い状態でやや不安定に変動」「動機づけが高い状態で不安定に変動」の3つの視点から教育的示唆が得られた。例えば、「動機づけが低い状態で不安定に変動」する場合は、教員は一方的な教授法ではなく双方向的なアプローチをとり、またタスクは実際の学習者のレベルよりもやや低いレベルのものを使用することが効果的であると結論付けられた。上記の内容を論文として執筆し、2023年下旬に国際誌に投稿を行い、現在査読の結果を待っている状態である。さらに、研究結果を2023年10月に大阪大学で実施された言語文化学会において発表した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

少子化や大学入試の多様化を背景としてリメディアル教育の必要性が高まる昨今の大学において、英語の授業を受けている学習者の内的な変化に焦点を当てた。分析結果に基づき授業における効果的なアプローチを提案し、今後ますます重要になると予測できるリメディアル教育に対して実践的な側面から貢献できた。さらに、まだあまり実施されていない複雑性理論を用いた分析を行ったことで学術的な意義も大きいと言える。

研究成果の概要（英文）：The analysis of the data yielded educational implications from three perspectives: "unstable fluctuations in low motivation," "somewhat unstable fluctuations in low motivation," and "unstable fluctuations in high motivation." For instance, in cases of "unstable fluctuations in low motivation," it was concluded that educators should adopt a bidirectional approach rather than a unidirectional teaching method, and tasks should be of a slightly lower level than the actual level of the learners. These findings have been documented in a paper submitted to an international journal in late 2023, and I am currently awaiting the results of the peer review process. Furthermore, the research results were presented at the Language and Culture Society conference held at Osaka University in October 2023.

研究分野：応用言語学（英語教育）

キーワード：英語教育 リメディアル教育 動機づけ 複雑性理論 変化点分析

1. 研究開始当初の背景

少子化や入学試験の多様化により、現在日本の多くの大学で学力の低い大学生が増加している。これらの学習者への教育はリメディアル教育と呼ばれ、彼らは学力だけではなく、多くの場合学習に対する動機づけも非常に低い。そこで、本研究では英語リメディアル学習者の動機づけを調査対象とし、その変化のプロセスに注目する。理論的枠組みとして、複雑性理論を用いる。複雑性理論では従来の枠組みでは説明しきれなかった発達 of 複雑な側面に焦点を当てることができる。そこから得られた結果をもとに英語リメディアル学習者を理解し、より良いリメディアル教育や支援、今後の日本の大学における英語教育に対し提案を行う。

2. 研究の目的

本研究の目的は、日本の大学における英語リメディアル教育学習者に焦点を当て、これらの学生の授業内における英語学習に対する動機づけの変化を複雑性理論をもとに調査し、その結果に基づき教育的示唆等を得ることである。

3. 研究の方法

本研究では、英語力が英検 4 級・5 級程度の英語学習者が 1 年間授業を受ける中で、英語に対する動機づけがどのように変化するかを調査する。授業内容は、アメリカのドラマを用いたコミュニケーションを重視した英語の授業で、受講者は大学 1 年生約 20 名である。週に 1 回 90 分の英語の授業における動機づけの変化について、以下の 4 種類のデータを収集する。

毎週授業終わりに Nitta and Asano (2010) で使用された Weekly Motivational Questionnaire (WMQ) への学習者による回答。

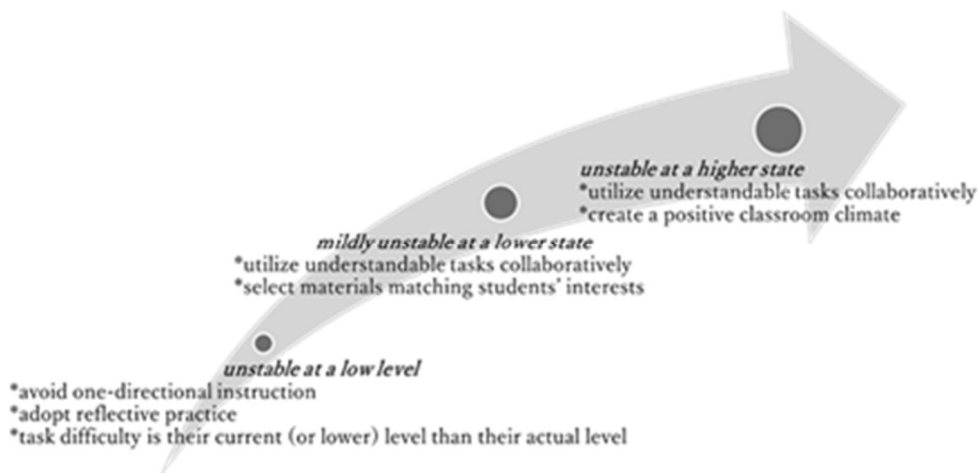
担当教員による各授業ごとの授業ジャーナルの記述。

学期末の学習者に対するインタビューデータの収集。

非線形モデル(上記 ~)のデータを踏まえ、非線形モデル(複雑性理論)に重点を置きながら、Nitta (2013)を参考に、『英語ドラマを教材として用いたコミュニケーション重視の英語授業において、英語リメディアル学習者の動機づけにはどのようなパターンが生じるか』、という点を調査する。彼らの動機づけがどのように変化するかを分析し、動機づけが向上・後退する要因をジャーナルやインタビューデータと照らし合わせながら考察したい。学習者の状態が「変化」したかしなかったかを決定する手法としては Nitta(2013)で用いられた質的分析手法を中心に、Change-Point Analyzer や SPSS などの統計的手法を用いる。最終的に、分析に基づいて英語リメディアル教育への教育的示唆を行う。

4. 研究成果

得られたデータは大きく 3 パターンの特徴的な変化の過程に分類でき、その特徴をそれぞれ明確に表している合計 5 名のケースを詳細に記述した。分析の結果、「動機づけが低い状態で不安定に変動」「動機づけが低い状態でやや不安定に変動」「動機づけが高い状態で不安定に変動」の 3 つの視点から教育的示唆が得られ、それらの要素を以下の表にして示した。



例えば、「動機づけが低い状態で不安定に変動」する場合は、教員は一方的な教授法ではなく双方向的なアプローチをとり、またタスクは実際の学習者のレベルよりもやや低いレベルのものを使用することが効果的であると結論付けられた。

次に「動機づけが低い状態でやや不安定に変動」している場合は、例えば学習者が理解できる内容の教材（難しすぎない物）を選び、他の学習者と協働して取り組ませるなどの工夫や、学習者の興味に沿う教材を用いるという点が重要であると示唆された。

最後に「動機づけが高い状態で不安定に変動」する場合は、「動機づけが低い状態でやや不安定に変動」と同様に、学習者が理解できる内容の教材（難しすぎない物）を選び、他の学習者と協働して取り組ませることに加えて、学習者が授業に参加しやすい教室内の雰囲気を作ることの重要性が示された。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1 . 発表者名 山岡華菜子
2 . 発表標題 非線形モデルを用いた英語リメディアル教育学習者の動機づけ分析
3 . 学会等名 大阪大学言語文化学会 第63回大会（招待講演）
4 . 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6 . 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7 . 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------